

お菓子に関する自伝的記憶

感覚モダリティからの検討

坪井寿子

（東京未来大学 こども心理学部）

【目 的】

自伝的記憶とは「過去の自己に関わる情報の記憶」と定義され(佐藤 2008)、さまざまな事象について検討されている。たとえば、私たちの生活に欠かせない食事について生理的な側面だけでなく社会的側面について自伝的記憶から検討されている(飯塚・松川 2008、飯塚 2009)。本研究では、過去経験の影響がより大きいとされているお菓子に関する自伝的記憶を取り上げる。お菓子については、食べ物であるので味覚が中心になりつつも、パッケージのキャラクターの影響などさまざまな感覚モダリティがまとめられていると考えられるので、感覚モダリティの面から検討していく。

【方 法】

研究参加者は、大学生生 88 名(男性 28 名、女性 50 名)であり、平均年齢は 21 歳であった。質問は「お菓子」に関する手がかり語法を用いた。それに対して、尺度（想起されたエピソードの鮮明度・重要度・繰り返し想起する頻度・当時の気持ち・振り返ったときの気持ち：1～6 点）を回答してもらった。さらに視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚の各感覚モダリティごとに記述してもらった。最後に、お菓子及び食生活に関する考えを述べてもらった。

【結果と考察】

1. お菓子に関するエピソード

「ねるねる」や「うまい棒」などの商品が比較的多くみられた。年齢としては、3 歳から現在の年齢までの広い範囲がみられた。幼少の頃はより強く印象に残っているエピソードがみられた。

2. エピソードに関する評価

各エピソードに対する評価値を表 1 に示した。鮮明度・頻度。当時の気持ち、現在の気持ちに関しては、男女差がみられなかったが、重要度に関しては、女性の方がお菓子のエピソードに関して重要度が高い傾向が示された。

3. 感覚モダリティごと

まず、五感の各モダリティについて記述してもらった。視覚については、色・形・大きさに言及していた。聴覚については、口に入れた際の音に関する記述がみられた。触覚については、手で触ったときの感触(手触り)に関するものと口の中で食べているときの感触(舌触り)がみられた。味覚は実際の味に関する記述であった。嗅覚に関しては、味覚とかなり連動している記述が多く、甘い匂いなど、味覚に関する形容詞も多く用いられていた。

このように、各感覚モダリティに関する記述を述べてもらった後、各感覚のうち最も印象に残ったものを挙げてもらった。その結果、視覚 12 名(15.4%)、聴覚 12 名(15.4%)、触覚 9 名(11.5%)、味覚 42 名(53.8%)、嗅覚 2 名(2.6%)、無回答 1 名(1.3%)であった。お菓子は食べ物であるので、味覚に関するものが多かったが、それでも味覚以外のものが半数あり、視覚、聴覚、触覚に関するものも多くみられた。その一方、味覚と密接に関係している、あるいはプルースト効果などのように嗅覚に関するものに関しては値が少なかったことが特徴的だったと言える。お菓子は、各感覚モダリティに関する記述と、それらを統合した全体的な印象である部分が示された。各感覚モダリティ間の統合について楠見(1988)についても示されている。

4. お菓子及び食生活に関する現在の考え

また、現在のお菓子については、食育との関連を中心にさまざまな記述がみられた。多くは、自身の経験も踏まえ、時間や量の調整に関する記述がみられた。

表1 エピソードに関する評価の平均値(()内は標準偏差)

	鮮明度	重要度	頻度	当時	現在
全体	4.01 (1.26)	3.73 (1.43)	2.96 (1.26)	4.87 (1.20)	4.34 (1.26)
男	3.93 (1.28)	3.23 (1.64)	2.95 (1.32)	4.88 (0.95)	4.20 (1.03)
女	4.06 (1.25)	4.01 (1.21)	2.97 (1.21)	4.86 (1.32)	4.42 (1.37)